

第 12 回全国子育てひろば実践交流セミナー

基調講演

「子どものためって何ですか ～見つめてみよう、育ちの根っこ～」

神戸大学 名誉教授 広木克行さん

こんにちは。

このたびは、第 12 回全国子育てひろば実践交流セミナーin おかやまにお招きいただきまして本当にありがとうございます。大変光栄なことだと思います。

実はいま、室長や橋本先生のお話を伺って、子育て支援ということについてこれほど多くの努力や工夫が重ねられているということ、改めて学習させていただきました。その中で日々努力していらっしゃる皆さんからすれば、その不勉強は批判されるかなあと思いつつ、初めて聞くことがとても多かった。そして、全体を聞きながら、今日の私のテーマに直結する問題としては、子どもを育てるということは本来家族と共同体の仕事であり、永く人類はそのようにして歩んできたはずであったわけですが、その共同体——人々が地域の仕事や労働を通してつながりを持つ、そのつながりである共同体、子育てを支える大きなネットワークになっている——が崩壊する中で、いわば子育て支援という言葉は、共同体のつながりをどう地域に再現するかという大きな歴史的な挑戦、まさにそういうものを、今皆さんはしていらっしゃるのだということ、ご報告と研究の結果を聞きながら、大変強く感じました。

コーディネーターの仕事がかなり詳しく今日は紹介されたわけですが、地域にある様々な要素、それは子育てをしている親だけではなくて、地域にある保育所やその他の福祉行政・公務の機関、また我々の所属している大学を含めて、地域にある様々な資源をつなげていって、一人ひとりの子どもの育ちに結びつけていく、それがまさにコーディネーターの仕事である。それを細かく分析していくと、先程のパワーポイントで示してくださったような、大変細やかな、かつ難しい仕事があるということが改めてわかるわけです。

本当に昔はこういうことをしなくても、地域の共同体のなかにこういう力が備わっていた。それが子育てを柔らかく包み支えていたということに、改めて人類の智慧といえますか、力に感心するものですが、我々は今それを、崩壊したといって嘆いているわけにはいかない。子育て中の親も悩み苦しみ、そして子どもたちもまた悩み苦しんでいる。それを我々はまさに自ら新しい社会、共同体に変えていくようなつもりで自分たちの仕事を組み立てる。本当に歴史的大事業だと私は思って話を伺いました。

さて今日は、そのなかで、第12回目を迎えて子育て支援拠点の本来の目的である「子どもの育ち」に今一度焦点を当てることで、その役割と目指す先を確認しあいたいという趣旨で開かれ、私の講演になったわけです。

あまりにも多く普段使っている「子どものため」という言葉——今日の私のテーマです——が、今ほどその意味を変質させられて捉えにくくなっている時代はない。本当の「子どものため」というのはいったい何なのか。そこを見定めながら我々子育て支援事業、そして子どもの育ちを支える仕事を見つめなおしていかなければ、支援をしている人は子どものためと思いながら、それが本当に子どもの利益なのか、そうでないのかということがわからない。まさに、子育て支援事業の原点とタイトルに掲げているこの問題——子どものためって何だろう？——ということを変えて見つめなおしながら、それに今後の実践が立ち返る、そんな原点確認の作業になればと思いながら、ここに今立たせてもらっています。「子どものため」という言葉は一つだけけれども、それが「子どものニーズ」を示した言葉なのか、「親のニーズ」を言い換えただけの言葉なのか、まさにそのことがいま厳しく問われているのだと、そう思います。

レジュメは41ページを開いていらっしゃると思います。この41ページと42ページにページを跨いでいて見難いかもしれませんが、できるだけレジュメを使いながらお話をさせて頂きたいのです。こと講演と申しますのは、皆様との対話でもありますから、皆様の反応がよろしくなければです（会場笑）、私の話がまずいということになりますと、そのときにはレジュメを無視して少し脇道にそれながらお話をしなければなりません。しかし、時間は限られておりますので、このあたりが最も緊張するところですが、一応レジュメを参考にしながらお話をさせて頂きたいと思っています。

子どものニーズと親のニーズ、両方のニーズがぶつかり合ったとき、子どものニーズが優先的に尊重されるということは本当に実現しているのだろうか。子どものニーズと親のニーズ、両方のニーズがぶつかったとき、子どものニーズは親にとっては大変煩わしいもの。それを退けて親のニーズを優先させていることはないだろうか。子どものためという言葉の持つ難しさは、まさにそこに関わっているのだとそう思います。

私は不登校問題をベースにしながら、ずっと子どものことを考えてきて、子どもの出すSOSの意味を深く捉えていくことから、この子どもが本当に求めていること、この子どものニーズは何だろうということを学んできて、具体的な事例、特に子どものカウンセリング、そしてその子どもにより沿い子どもを何とか助けたいと思っている親のご相談を受けながら仕事をさせて頂いていました。そして、先程橋本先生のご報告にもありましたが、子どものカウンセリングをしたり、親の相談を聞きながら本当に思うことは、この子の乳幼児期がどれほど大切であるのか、この子の乳幼児期がどうであったのかということを実に知りたいたい、ということでした。

みんな「子どものため」と思ってきたはずの、その「子どものため」が親のニーズとすれ違ったまま幼児期を過ごしたことがわかれば、この子どもが今抱えているストレス

を理解することはそんなに難しくない。そこで、不登校は学校に行っている子どもの問題なのですが、私自身は保育所に入らせていただいて、0歳から小さい子どもたちを懸命に育てている保育のプロの皆様のそばで学びながら、その保育を通して「子どもを見る」。幼児期に本当に必要なもの、子どもはそれを言葉では示さないけれど、様々なしぐさや表情や色々な形で我々に示してくれる。そこを読み取る力を自分につけながら、なんとかつけようと努力しながら、不登校の子どもの話を聞きながら、その子の生い立ちがイメージできるような自分になりたい、そんな気持ちで仕事をしてまいりました。

今も、全国で仕事をさせてもらいながら、この「子どものため」、親のニーズと子のニーズとのすれ違いということに出会う場面がものすごく多い。

導入に、1つの具体的な事例から入ってみましょう。

先だって私は京都のある地域に行って、子育ての講演会をさせて頂きました。その講演会の終わった後、今日は公開の子育て相談会にしますということで、最後にご希望の方は残ってくださいとお願いしました。そうしたところ、20人からちょっとそれを越えるくらいの方が——お母さんたちがほとんどでした、お父さんも一人いらしたのかな——残ってくださいました。みなさんから色々なご質問が来る。そのご質問に私なりに感じたことを率直に対話型でお答えする、答えるというより一緒に考えるという気持ちでお話をさせて頂きました。

これで最後にします、と司会者の方が言われて、最後に一人のお母さんが手を上げて質問をしてくださいました。そのお母さんはこうおっしゃったんです。子どもが塾に行くのを嫌がるんですけども、どうしたらいいんでしょうかって、尋ねられたんです。とても若いお母さんでした。私はそのお母さんに「お子さんはおいくつですか？」と尋ねました。お母さんは「1歳半です」(会場笑)と。そしてお母さんに「何の塾でしょう？」とお話をきいたら「英語の塾です」(会場笑)と言われました。

そのお母さんとのそういういくつかの対話をしながら私が感じたのは、本当にこのお母さんは一生懸命に子育てしていながら、親が思う子どものためと、そして、子どものことをなまじ知っている我々であれば、それこそ笑わずにはいられないようなことを懸命にやっている。しかも、それが思うようにならないことを、公開の場で勇気を出して相談してくださった。このお母さんの勇気は本当に尊いと、そう思いました。

お母さんに「本当に、今勇気を出して相談してくださいましたね。そのことにまず私はとっても感動しています。子どもさんのことをここまで考えていらっしゃる、そのお母さんのお気持ちが伝わってきたからです。」ということをお母さんにお話ししました。そしてもうひとつお母さんにお話し申し上げたのは、「このグローバル時代、世界に羽ばたくことができるような、そういう優秀な子どもに育てほしいというお母さんの願い、賢い子に育てほしいという願いは、とても健康なものだと私は思っています。私もわが子を育てながらそういうことを思わない日はなかっただろうと、そう思うのです。賢い子に育てほしい、できるならば世界に羽ばたけるような子どもに育てほしいと

いう願いが間違っているのではない。」と。でも、私はそのお母さんに、「その願いは本当に共有できるし、ここにいる皆さんも同じだと思いますよ。」とお話しした上で、「ひとつだけ違うことがあるのでちょっと聞いてください。それは、賢い子どもに育てたいという願いを実現するためには、子どものいわば育ちというところに即しながらの、その方法がある。その方法が、いかにも子どもが拒否したくなるようなことをお母さんがなさっているように私には思われる。大事なのは、子どもの育ちの循環ということを一度ゆっくりと学ばれて、そして自分が子どものためにと思っていることをもう一度捉えなおしてみたらどうでしょう。」ということをお話しいたしました。

1時間半くらいの講演が終わって、それから40分くらいの子育て相談会が終わり、そのまま帰るわけにはいかないの、そこでまた子どもの育ちの順番の講義を始めなくてはいけなくて、またそこから40分くらいお話をしまして、ただ人がいいだけがとりえの広木君はこんな風にして（会場笑）いろいろな所でお話ししているんだなと、つくづく自己評価をしながらですね、そんなお母さんのお話を聞いたんです。お子さんがそれを拒否する、それはある意味とても健全な子どもの感性です。こんなことはもう面白くないし、嫌だし、不快だし、1歳半というとまだ日本語だってたどたどしいのに、英語ということをやらされていたらね、親の思いは切々と伝わってくるけれども、やはり子どもと親の間に大きなミスマッチがある。

おそらく今のような例ばかりではないと思いますが、皆さんが地域で出会っている多くの子育て中のお母さんたちに、皆さんから一言、子どものことをもうちょっとよく見ると、子どもさんはこんなことを願っていると思いますよとお伝えしたいけれども、実際にお母さんに直に触れている方がそうお話をすると、お母さんが自分の子育てが否定されたかのように感じて、そう言われるならもうここには来ないなどという反応を示されることもあると思うんです。

子育て支援は支援者が正しければ良いのではない。もちろん、支援者は子どもの育ちをしっかりと、そして親の願いを理解する力も、ともに必要ですが、それだけではなくてやはり親とともに悩み、親とともに考えながら、どこが一体子どもにとってミスマッチなののだろうかということと一緒に考えていくだけの奥行きのあるサポート、奥行きのある関わり方、それがおそらく子育て支援の場合には大変必要なのではないかと考えています。みんな子どものためと思ってやっていることが子どもとミスマッチを起こしているケースのなかで、子どもたちが多くのSOSを出している。子どもたちの育ち自体がもつれ始めていて、その育ちのもつれが行動になって出たときに、それはまさに子どもたちからのSOSと捉えることができるのではないかと思います。

いまここで、「育ちのもつれ」という言葉を使わせていただきました。親のニーズと子どものニーズのこのずれを、それを無下に子どもに押し付けると、これはとんでもないミスマッチ状況になる。育ちがだんだん、段々ともつれてくる。実は、「もつれ」という言葉は、私とても大事にしている言葉でね、「もつれ」という言葉は丁寧な根気よ

くほどいていけば、また元のようにしっかりとした一本の糸に戻っていく。ですから子どもたちの育ちのもつれは、もつれなのであってそれは異常なものではない。ミスマッチから来る様々な不愉快感や不快感、そういうものから子どもの育ちがどんどんもつれていった。そのもつれを解くには時間がかかる。でもそのもつれを解くのに、お母さんの力を借りずに子どもの育ちのもつれをほどくこと、最終的にほどいて子どもの育ち直しを実現することは非常に難しい。

そのためには、先程も橋本先生の発表にもありましたが、まさに、その親こそが主体者であり、その主体者ととも子どもたちの育ちのもつれをほどきながら子どもの育ち直しということを実現していく。それが今、皆様に求められている子育て支援の非常に重要な中身ではないかと、そう思っています。

さて、子どもたちの心の問題、特に育ちのもつれに私は関わったのですが、子どもたちの育ちのもつれは、大きく分けて2つのメッセージとして出ていると思います。

ひとつは子どもたちがどこまでも親に愛してほしい、愛されたいという愛を求めながら得られない、それが子どもたちに非常に大きなシグナル、SOSになっていると思います。愛を求め、安心を求める、その子どもたちの心を我々はいったいどう理解し受け止めたらよいのか。

そしてもうひとつ、心の底から「遊んだ!」「遊びきった!」と思えるほどに友だちと一緒に過ごすことのできる、そんな友だちとの関係を求めて子どもたちは得られない、不完全燃焼な状況です。それが、子どもたちのもうひとつの、育ちのもつれの背景、原因ではないかとそう思っています。

みなさんは、子どもが愛を求めるとするのは当たり前だと思いかもかもしれません。でも、親の子どもへの愛って何だろうと尋ねられれば、まるで哲学問答のように凄く難しくなりますよね。愛などという深いテーマを一言で述べることは非常に難しい。ただ、それをイメージするのに大変役に立つ言葉を、私はマザーテレサから学びました。貧しい人々、全ての人に愛を捧げた、そのマザーテレサの言葉の中にはまさに愛が詰まっていますね。

世界中の有名人に、「世界で一番美しいところはどこですか?」と尋ねられて、ある映画俳優は、「マッターホルンの頂に立って、そこからアルプスをずうっと見たときの景色ほど美しいものはない」と、そう答えていました。マッターホルンに登ったこともない広木君は、「そんなものかな」と思いながら(会場笑)その映画俳優の話を聞いておりました。そしたらその次のまた有名人にマイクを渡してね、「あなたにとって世界中で一番美しい所は?」と尋ねたらその人は目をキラキラさせながら、「それはカリブの海にダイビングをして潜ったときの、あの海の中の美しい景色はもうこの世のものとは思えない」、そんなことを言うわけですね。カリブに行ったこともない広木君は「そんなものかなあ?」(会場笑)と思いながらまあ聞いているわけですよ。

世界中にはいろんな所を見ていらっしゃる方がいるんだと感心しながら見ていると、衛星放送のテレビでは、インタビュアーがマザーテレサにマイクを向けます。彼女の住んでいる、それこそスラムと言ってもいい、そこで行き倒れて死んで行くような、その人々の傍に寄り添いながら、その人たちにどのようにして命を守り、身体を守り、そして自らの人生を全うしてもらうか、そのために寄り添っていたマザーテレサ。そのスラムの中でマザーテレサにマイクが向けられました。

あなたにとって一番美しい所はどこですかと聞かれると、即座に、子どもの笑顔がある所です、とマザーテレサは答えられました。子どもの笑顔がある所、そういうことをいつも自然に言えるこの人は、凄い人だな、とそう本当に感じていました。そして、こんな質問も出されました。あなたにとって愛の反対とはなんですか？——愛とは何ですかと尋ねられたのではなくて、愛の反対言葉は何ですかと、そう尋ねられました。それを聞いた時に、広木くんは軽率にも頭の中で考えたのです。愛の反対は「憎しみ」だろうか、「恨み」だろうか、などということ。きっと漢字でばっちり2文字くらいで表せるんじゃないかと考えている私がありました。マザーテレサは、その質問に対してちょっと考えて、こう答えられました。

「愛の反対は無関心だと思います。」

無関心。それを聞いた時もう、胸がドスンと突かれたような大変な衝撃を受けました。確かにそう。人から関心を持たれない、この無関心こそ人間を深く傷つけ、その人間を苦しめる。今学校で問題になっているいじめも、子どもたちを死に導くほどのいじめは多くの場合、クラス全体からのまさに無関心、まさに無視。それがどれほど子どもを傷つけるか。暴言と暴力もさることながら、この無視、無関心ほど子どもたち、人間を傷つけるものはない。皆さんは自分自身に問題を引き合わせて、自分の仕事場で、もし自分がみんなから関心を持たれない無関心、そして無視されたら、自分は一日たりとも、仕事を続けるどころか生きていくことだって難しいと思うかもしれない。

無関心、その無関心の目を向けられた多くの方は、自分に関心を示さない人への怒りよりも、関心をもらえない自分が価値の無い人間だという、自分自身に強い不満、強い攻撃を向け、そこに多くの子どもたち、多くの大人たちの心が歪むんですね。無関心は本当に人の心を深く深く傷つけ、最も恐ろしい、まさに愛の反対のことなのだという事を、私はマザーテレサの言葉から知りました。

すなわち、子どもを愛するという事は、マザーテレサ流に言えば「子どもに関心を持つこと」ということなんです。多くの親は、子どもに関心を持っているから子どものためという。でも、この関心の持ち方は、その一人ひとりの子どもの特徴や個性への関

心ではなくて、他の子どもと比べた「差」に向かっている。あの子よりもできないとか、あの子よりも足が遅いとか、あの子の方が可愛いとか。まあ、何でもかんでもそうだけれども、他者との比較に関心が集中して、その他者との差を埋めようとして、子どもにああしたらよいのではないか、こうしたらよいのではないか、そうしていつの間にか子どもへの関心のつもりが、それは他者との比較、その格差への関心であったりする。そうするとその関心が、子ども自身の思いとはどんどんずれていってしまう。子どもを傷つけることになる。

大切なのは、子ども一人ひとりへの関心であって、他の子どもとの比較による差ではない。多くの親たちが、その一人ひとりの子ども、我が子への関心、そこに目が向いたとき、子どもたちはものすごく元気になり、自分自身を親がちゃんと理解し、そういう目で見ると、私の今までの臨床経験でも、たくさん事例が思い浮かびます。

あるお母さんは、——子どもは女の子で、中学生でしたけれど——私の研究室に来て相談を始められました。不登校になって、もう半年くらい経っています。その子どもに対して、お母さんが「お姉ちゃんはこのことができるのにこの子はこれができない」「お姉ちゃんはどうするのに、この子はそうしない」、お姉ちゃんはこのが…ということ、ずうっと比較して言うんです。聞いているほうが悲しくなる。そこで、念のため思ってお母さんから見て、そのお嬢さん、不登校のお嬢さんの素敵どころ、良いところはどこですか？とお尋ねしたところ、お母さんは言葉を吞んで、「んっ」と考えられたんです。そして、「見つかりません」って言うんです。ものすごく残酷です。そこでお母さんに、来月、カウンセリングに来られるときまで、お子さんをよおく見られて、このお子さんの素敵どころ、お母さんにとって素晴らしいなと思うところを1つ探して来てください。それがとても大切なことだと思うのです。そう話しました。

そしたらね、2週間くらい経ったところでお母さんから我慢しきれなくなって電話が来たのです。そのお母さんが電話の向こうでこう仰る、「こんなものでもいいんですか?」。こんなものってどんなものだと思ったら、「うちの子猫を可愛がるんです」と言う。「猫を可愛がる、とても大事なところに目が向きましたね、お母さん。猫を可愛がる、猫の通り道を確保し、猫の排泄場所もちゃんと確保し、そして猫に餌をあげる。時には猫を撫でて、猫への愛着をしっかりと示す。お嬢さんはとっても優しい思いやりのある心の、そんな持ち主ですね。」と話しながらね。そのお嬢さんの素敵どころ、そこを見つけれられたお母さん、素晴らしいですよ。そうやってお母さんに話したんです。

そしたら、また2週間経って研究室に来たときには、いや実はこの子はこんなところもあったし、こんなところもあったしと、そのお嬢さんをきちんと見つめた結果を報告してくださいました。それは、お嬢さんとお母さんの関係が大きく変わる転機でした。

いつもお姉ちゃんとの比較で、お姉ちゃんはこの子にはできない、この子はこれができるけどこれができない、だから親は時々残酷にもこう言います。「お姉ちゃんこの子を足して2で割ったらいいのに」なんて、よく平気で言うんですよ(会場笑)。

私も子どもの時、そんなことを言われたような、言われたいような、複雑な気持ちなんですけども。「足して2で割る」って、ねえ…（会場笑）。それはどうしてもある種、良いところとあまり良くないところを足して2で割ればもうちょっと楽なのに、そんな気持ちが込められているのかなと思います。

一人ひとりの子どもへの関心、お姉ちゃんはここが素敵、そして妹はここがとっても大切、この子はここが伸びてくれたらいいな、そんなことを考えてそういう思いで子どもに声を掛けていると、言葉には棘が含まれません。でもお姉ちゃんに比べてあれが足りない、これができない、だからこれをさせようという心を持って言葉を話すときに、どんなに噛み砕いていっても子どもの心には、棘を含んだ言葉が届くんです。それは愛ではなくて、なにか自分への不満、欲求不満を親は持っていると感じて察知します。こうして、愛という大変難しいテーマを考えるときに、マザーテレサの言葉を参考にすると、物事を考えるこんな視点が我々に与えられる、そう思ってお紹介したわけです。

皆さんは、日々お会いしている子どもたちに、あの子はここが足りない、あれが足りないといって、「普通」という基準や、または他の子との比較によってその子を見ることがありはしないか。子どもがそのような目で見られたときに、実は子どもはそこから深い心の傷を受けてしまうのです。こうして、子どもの中に育ちのもつれが起きているということも知っておいてほしいと思います。

今、子どもたちは大変難しい勉強と、そして愛に飢えていることのその中で、本当に辛い思いをしています。子どものこんな詩があるのです。小学校2年生。ついこないだまでそれこそ幼児だった子ですね。

赤ちゃんのぼく、うっとり足をくんで、にっこり笑って、ぼくもこんなにくつろいでいるときもあったんだな。今はもう、こんなにべんきょうがあつて、もうたいへんだ。昔のぼくになりたい。

小学校2年生です。ちょっとドキッときますでしょ。くつろいでいるということは、多分、0歳か1歳か2歳かだと思うんですけどね。私はこの詩を読んで、小学校2年生が「昔の僕になりたい」と言うところに、本当に心が痛んでいます。

私のような年寄りが若くなりたいと言うのは、これはわかるでしょう。大体年寄りも過去を懐かしむわけですよ。昔の私に戻りたい。でも子どもたちというのは未来を見て、お兄ちゃんみたいになりたい、素敵なこんな風になりたい、それこそアニメの主人公のようになりたい、子どもたちは将来の自分に夢を馳せながらそれをイメージしたわけです。それを成長の、まさに発達のエネルギーにしているはずなんです。ここにはそんな

な夢がない。昔の僕になりたい、小学校2年生にこういう言葉を言わせるということ自体、本当に子どもの辛い、育ちのもつれを表していると思います。

こんな小学校2年生もいるんです。

犬はいい、きらくで。学校に行かないし、あそんでもらえるし、しゅくだいもない。さんぽも行ける。あとはきまった時間にえさももらえる。あとはねるだけ。いいなあ、ぼくも一日でいいから犬とおなじせいかつをしたい。

(編註：表記は原文とは異なります。)

犬と同じ生活をするのが、夢になってしまっている。小さな子どもたち、特に小学校1、2年生くらいの子どものおままごとで、みなさまのほうをご存知ですが、何になりたいかというママじゃないんですよね。多くの子どもたちがやっぱりこの詩のように赤ちゃんになりたい、愛されたい、無条件に受け入れられたい。一番が赤ちゃんになりたいのですけれども、2番目はペットになりたいんです。ペットも大事に扱われるから。まさにそういうことが、子どもたちの詩の中に表れてきているんです。

これは、それこそ子どものニーズ、子どもが本当にその良さを、素敵さを、それを認められる。弱いところだっていっぱいあるんですよ、誰でもそうですよ。でもこの子はここが素敵、この様子のこの子を見ると惚れ惚れするわ、と言われるような、そんな励ましを受けて育っている子どもはこういう詩は書かない。5年生になるとこの子たちはもうちょっと進化している。

小学校5年生。

「気分のいいとき」

マッサージ機に座っているとき

お風呂に入っているとき

ぼおっとしてねているとき

お茶を飲んでほっとしたとき

(編註：表記は原文とは異なります。)

私はこの詩を読んだとき思いました。この5年生は何歳だろう。そう冗談も言ってみたくなるほど、子どもたちの心の中は、相当疲れています。これも実は、子どものために色々やったださるし、色々やらされるその中で、子どもの中に夢が育つのではなく、

希望が育つのもなく、何かとても今辛いというこの辛さ、赤ちゃんのように、ペットのように、またはおじいちゃんのように、あのよにのんびりしている自分がいい。それで何も文句を言われぬ。そんなことに子どもたちは憧れているんだという。

ところがね、長野にある子ども病院——ものすごく重い病を得て、おそらく退院することはないであろう、そういう子どもたちが入院している——、その中にある院内学級で子どもたちが書いた詩が載せられた、「電池が切れるまで」という一冊の本があります。その中で、小学校3年生の日原智大君、この子は今歩くこともできず、栄養も人工栄養でお腹の中に入れてね、もう既に検査に次ぐ検査で、本当に辛い状況にいる日原君の詩です。

ぼくは
一度でいいから
走りたい
思いっきり走りたい
広いグラウンドで
広い草原で
お日さまの日にあたって
思いっきり
走ってみたい
学校のお友だちと
みんなで走ってみたい

(編註：同書 16 頁)

とても健康な詩です。命が、それこそチューブでつながれて維持されているとは思えないほど健康な詩です。私は、この子は両親に愛されている子どもだと思ふ。生まれてくれてありがとう、私たちの子どもであってくれてありがとう。そうやって、丁寧に大変な検査を受けながら、懸命に生きる命を燃やしてくれてありがとう、きっとそう親からその思いで言葉を掛けられている、そういうお子さんだと。心の健康な詩を彼らは書いているのです。体が元気であるにもかかわらず先程のように、赤ちゃんになりたい、ペットになりたいという詩を読むと、本当に子どものためということ、我々が子どものニーズに即して使えるようになる、それに気付くということがどれほど大事かであるかということ、本当につくづくと思わざるを得ません。

今日は子どもの、育ちということ、子どもの発達、子どもの見方、そこを皆さんにお話しするためにこういう事例を出しているわけです。

さて、私は子どもたちの育ちともつれ、すなわち子どもたちのSOSを通して子どもたちと関わっています。今も多くの子どもたちが、一生懸命子どものためと思って子育てをしてもらっている子どもたちが、どのような問題を抱えているかということから、3つに整理してお話しします。

その1つは、子どもたちの行動に表れるシグナルです。

2つめは、子どもたちの身体に表れるシグナルです。

そして3つめは、子どもたちの症状に表れるシグナルです。

子どもたちの行動に表れる症状——第1の問題ですが——その多くは暴力や暴言や多動やパニック、そういう症状として子どもたちに表れています。

「子どもの「脳」は肌にある」という大変珍しい本を書かれた山口先生。その山口先生の本に小学校1年生のA君の例があります。小学校1年生のA君は、入学して間もなくから、もう落ち着かない。友達を叩く、蹴る、授業中はクラスを抜け出す。友達の物も盗む。そういうことを次から次へとやりまくる。いったいこの子はどうしたんだろう、そう思って先生はお母さんと相談をして、念のために精神科の受診をお願いします。お母さんも、先生の信頼があったということもあって精神科を受診されます。

ドクターは、この子はひよっとしたらADHDかもしれない。現在、発達障害というものへの見方は急速に広がっていますが、お医者さんも発達障害かもしれない、この子の症状を見ながら言われたそうです。ただ、この子の担任の先生は、本当に凄い力量の方だったようです。医者は発達障害だと断定されなかった。「かもしれない」とは言った。だとすれば別の可能性がある。ということで、その可能性を求めてお母さんとじっくりと話し込んでいく。

話し込んでいくうちに、問題となることは見つからないように見えたが、やがてお母さんからこんな話を聞くことができた。実は、この子とは一度も添い寝をしたことがありません。それは友達から、添い寝をすると乳離れをしにくくなる、将来は自立ができなくなる恐れがある、と言われたので添い寝をすることをやめ、そして、しっかりした子に育ててほしいから、子どもを厳しくしつけて、時には叩いたりもした。そうお母さんが言われたそうです。

その先生は、このお母さんのこのお話に非常に深く感じるものがあつた。この子はひよっとすると接触飢餓、触れられないこと、スキンシップ不足への、まさにそれを飢餓状態として、多動状況を表しているのではないか。他人に暴力を振るったり暴言を吐いたり、そういうことの、そこにひよっとしたら原因があるのではないかと先生は考えられて、学校のその子どもに関わる先生たちに、その子と会うたびに、できたらチョッと触れてあげて、養護の先生だったら「熱があるのかな?」「元気かな?」そういつてチョッと触れてもらう。他の先生とそうやって、時には子どもを抱っこして、そういう関わり方をしてくださいと呼びかけました。そして、お母さんには、ぜひチャンスがあつたら添い寝をして、しっかりと子どもを抱きしめて寝てください。とお願いしました。

この結果、日が経つにつれて、1か月、2か月と経つにつれて子どもはどんどんと落ち着いていきました。そして、1年経ったら、その子はもう全く他の子どもと変わらないように授業に集中して取り組めるようになりました。もしも、発達障害であれば、1年経って症状、状態が変わるということはあまり考えられない。だとすれば、これは発達障害ではなく情緒的な混乱、情緒的な問題がこの子を多動にさせていたのではないか、しかもそれがどうも「接触飢餓」といわれるスキンシップの不足から来る、子どもたちに起こる心の問題を表しているのではないか。

これには、アメリカのスコットの研究がありまして、アメリカで非行の子どもたち、ものすごく強烈な問題行動を起こす子どもたち、特に少年刑務所に入ったような子どもたちを調べてみると、小さい時に親のスキンシップのない、触れられていない子どもが非常に多いんです。そのことから、「接触飢餓」という、常に接触を求めて、求めて、行動してしまうために、思春期に様々な性的非行に走ったり、その接触を求めているような異常行動に走ることが分かったわけですね。そのことを学んでいたために、彼は、ひょっとしたらこの子は接触飢餓をこの状態でSOS、育ちのもつれを表しているのではないかと仮定して親と話し、先生たちと話し、触れ合いを求めながらその子に関わっていったという事例が、「子どもの「脳」は肌にある」、こういうユニークな本の中に登場する一人の少年なんです。多動な子どもたち、発達障害かもしれないとつい思ってしまう、そういう子どもたちのなかに、この触れ合い不足の子どもたちが相当いることをよく知っておいてほしいと思います。

と申しますのは、私はこのことをあえて話す場合、もう既に30年以上も前——そう、私が子どもを授かって育て始めた頃、子育ては布オムツから紙オムツへの転換を始めていました。そして、紙オムツで育てた子どもたちを見ながら、私はそれが大変危険なものと思えて仕方がありませんでした。

街を歩けば、子どもを育てている家にあの布オムツがひらひらしていた時代がいつの間にか去って、どこのお家からも布オムツが消える。皆さんはご存知と思いますが、布オムツ、1日平均何回取り替え、何枚取り替えるか。小児科の調査によると20回から25回、子どもはオムツを替えるといいます。それだけ、まるで小鳥のように飲んでは出し、飲んでは出しですから、そうやって子どもたちはしょっちゅうオムツを汚しているわけです。

そして汚せば泣きますでしょ？ 泣くとどうする。例えば母親と子どもの例で考えてみると、お母さんはそれまで何か仕事をしている、昔であれば縫い物をしているかもしれない、料理をしているかもしれない。でも、子どもが泣けばお母さんは自分の手を止めて「どうしたのかな？ オムツかな？ お腹が空いたのかな？ 甘えたいのかな？」いろんなことを考えながら子どもに関わりますね。しかもそれが1日に20回。

私は、紙オムツのことを考えながらこう思いました。母親は自分の仕事のリズムを止めて、子どもの求めたときに子どもに合わせる。そしてまた自分のリズムにもどる。こ

れは、子どもを授かって親になった者が、母親になるプロセスだなど。自分のリズムと子どものリズムとを調和させる。そのために自分のリズムを一度止めて子どものリズムに関わり、そしてまた自分のリズムに戻ることを、大変困難ななかで子育てをする。それをおばさんやおばあちゃんや地域の中でいろんな人達の助けを得ながら、お母さんたちはそうやって子育てをしてきたのではないか。

さて、みなさん。紙オムツになってから多くの母親が、または家族が、子どものオムツを替えるのが1日に何回になったと思いますか。小児科の柳澤先生の調査によると、紙オムツの交換は平均7.5回です。吸湿性もあるし、ちゃんと守ってくれますから、布オムツのようにそう頻繁に取り替えなくたっていい、そういう意識があるから7.5回。そのデータのなかで一番少なかったのは、1日に3回。子どもは大変ですよ。ダボンダボンのオムツを引きずるようにしながら履いていたらね。これは、柳澤先生はスキップの回数が圧倒的に減ったことと、子どもの落ち着きのなさとの関係として、本の中で述べていらっしやいます。

私は本当にそうだと思いますが、同時にこう思うのです。紙オムツの交換が7回半ですむというのはどういうことか。それは、子どもが求めたときに自分の仕事の手を休めて子どもに関わるのではなくて、紙オムツだから大丈夫だと思っているから、自分の仕事をずっと続ける。そして、取り替える時は自分の仕事が一段落した時。子どもが求めて泣こうが泣くまいが一切関係なく、自分の仕事が一段落した時に、「き、オムツ大丈夫かな？」と言ってですね、「うわ、こんなに溜まっちゃった」となどといってオムツを取り替えるわけですね。

こうして、子どもが求めたときに自分のリズムを一旦止めて子どもに関わること——これを応答性といいます——、子育てにとってまず大事なものは、この子どもと、子どもに関わる親との応答性です。子どもが泣いたときにオムツだろうか、それともお腹が空いたのだろうか、そんなことを思いながら自分の仕事の手を休めて子どもに関わる。まさに応答的な関わりをしてきたこの応答性とは全く逆で、紙オムツを7回半ですむというのは、自分の仕事のリズムは一切変えずに、仕事が一段落ち着いた時に、やれやれと思って子どものオムツを取り替える。子どもは求めていない。どこまでも親中心のリズムを貫いている。

子どものリズムと大人のリズムは全然違いますから、子どものリズムに応答する、合わせながら子どもとの関係を築いていき、親になった者が母親となり、そして父親に育つということ、その関係性が、紙オムツの登場によって大きく後退しているのです。だから、子どもがやがてはいはいするようになり、つかまり立ちするようになり、そしてヨチヨチ歩くようになると、用事をしているお母さんの所に来て甘えてしがみついてきますよね。そんなときにお母さんたちがイライラするようになるんです。

そのときに手を休めて「どうしたの？」って子どもの方を向いてね、「お母さん今忙しいんだよ。手を離せないから、後で遊ぼうね。」そうやってまた自分のリズムにもど

ってもらって、自分の手を休めるという学習をしていかなければ、子どもがまとわりついてくると、「お母さん今忙しいの！」といって子どもに思いがけぬ言葉をかけることになってしまう。

なかにはこんなお母さんもいらっしゃいました。子どもがまとわりついてくると、「お母さんの気持ちもわかってよ！」（会場笑）。1歳の子どもの、お母さんの気持ちもわかってよ、というのはどういうことか。これほど、自分の手を子どもに合わせて止めるということは、そう簡単なことではないのです。

このように親になることと、母親となること、そして父親となることの間には大きな違いがある。

私は文明の利器を否定する人間ではございませんので、だから紙オムツを止めたほうがよいという結論ではないのです。紙オムツは吸湿性もいい、保水力もある。だから一日に二十何回取り替えなくても、それが十回であってもかまわない。大事なのは、子どもが求めたときに「なにかあったのかな？」と自分の手を休めて子どもに関わり、「おしっこしたわね。でも大丈夫だよ。ね。もうちょっとこれで我慢してね。」（会場笑）と子どもに言って、また自分の仕事に戻る。まあ、便利な物っていうのは危険なものなのでね、皆さんが笑ってくださるということにはほっとするんですけども。同じ紙オムツで育てるとしても私たちが「応答性」という言葉を知らずに、子どもが泣いて求めたときにそれに応え、向き合う、そここのところの、子どもとの関係づくりでもっとも基本になるような親子関係のことを割愛して便利さの中で子育てしてしまうと、いつの間にか親と子の間には非常に大きな心のすれ違いが生まれてしまう。

このように、子どもが新生児の頃から、まさに子育て支援が大事なんです。子どもが生まれ、そのときからオムツってこうなんだよ、といってオムツを替えるということには、こんな意味があるんです。ということで、「ちゃんと話せる指導員」であるという、親と子の心の交流が、愛着関係の形成に向けての第一歩から回りだすわけです。いま、この第一歩で、歯車が上手くかみ合わない状況が、少なからぬ親と子の間に生まれている。

スキンシップ、よく使われる言葉でそれには結構深い意味がありますが、「接触飢餓」などという状況の子どもが生まれる程に親と子の触れ合いが少なくなる。それを加速させるような便利な文明の利器が私達の周りに溢れているということ、よく知っておく必要があるということをおもいます。

私がこうして話しますとね、「私の子どもは男の子で中学生だからスキンシップ無理だわ」と言うお母さんたちがいらっしゃいます。小さい子ならね、一緒にお風呂に入ったり、添い寝をしたりできるけれども、中学生や高校生になって「先生、これから育ちのもつれをほどくことができますか？」そうお母さんたちが相談して下さいます。皆さんどう思います？

臨床教育の研究者として、そういう、どこの教科書にも書いていない答えを求めて、私は必死になって考えるわけですね。そして、色々な人に話を聞いてわかってきたことは、それでもやはり子どもは母親との触れ合いに本当に心を休める。ただ、中学生や高校生になって触られていい気持ちなんて言えないですもんね。それは男の子の汚券にも関わりますので。私がそんなときによく言うのがですね、でもね、1か月に1回、耳の掃除くらいはできるんじゃないですか。耳の掃除をちゃんとすると、ほらお前がいつもイヤホンで聞いている音楽が良く聞こえるんだよ。お母さんが耳の掃除をしてあげるから1か月に1度おいでって。これは結構説得力がある。いろんな所でその翌日から実践してくださる方が多くなりました。子どもとの接触不足を深く反省された方が、今から親子関係をつくりなおそうと努力された姿だと、そう思います。

私がそのことに気がついたのが——私自身が大変な甘えん坊でございましてね、母から耳の掃除をずうっとしてもらっておりました。こんなたくさんの人の前で白状するのは辛いものなんですけど、私が耳の掃除を、これで最後にしますと言ったのは、恥ずかしいのですが私が20歳の時でございまして（会場笑）。それまで母から、「克行や、耳の掃除をするからおいで」と言われれば、もう何をしても抵抗できない状態で、母のひざというのは本当に極楽の境地ですね。母から耳を掃除してもらって、そして「はい、反対」と言われたときの時間の短さ！（会場笑）

そしてこれも大人になってから気付くのですが、あの黙祷の1分と比べてなんと短いことか。黙祷1分、長いでしょ。母は1分以上やってくれているんですよ。なのにすぐ終わる。そしてもう一方が終われば「はい今度は妹」という風に順番がある。もう母のひざにずうっと頭をもたげる、その時の本当に極楽のような感情をね、貧しい家庭だったけれど豊かに味わわせてもらいました。そして20歳の時に、もうこれで最後にしようって決心しまして、これで最後、とちょっと恥ずかしくて言ったのです。あんなにふくよかだった母のひざがこんなに小さくなってね。いま98歳で、老人ホームで頑張ってくれているんですけども、その本当に小さくなった母のひざに頭をもたげて、この母から全て吸い取って今があるんだなあ本当に思います。工業高校を出てから一旦社会に出て、それから大学に行きたいと思って勉強している、ちょうどその端境期の時に、母からたくさんのエネルギーを吸い取って本当に今の自分があるんだなあと思ってね。耳の掃除をしてもらいながら何だか涙が流れ落ちそうな気持ちになりました。

子どもにとって母親との触れ合いというのは本当に短い1分であっても、どれほど子どもの心を温かくするのか、そして心のミスマッチを修復するものすごいエネルギーを子どもに与えるか、こういうことも皆さんが子育て支援の中で大切な1つのアイディア、智慧になるのではないかと、私はそう思っています。こうして行動に暴力や暴言やパニックやそんな風に表れてしまう子どもたちの心の底には、実は触れ合いの不足、葛藤、やりきれない思い、そんなものがあるというのが最近ではわかっているんですね。

ただね、皆さんの前に来る子どもたち、児童館などに来る子どもたちの中で、どうもスキンシップはちゃんとしているはずなのに、どうしたのかなあという風に思っている子どもたちのなかに、もうひとつの触れ合い、すなわち「心の触れ合い」が非常に不足しているために落ち着かない子がいます。その心の触れ合いが足りないために落ち着かない子どもの特徴は、ほぼアイコンタクトが成立しないことです。

目と目を見て話す、これを是非やってみてください。ちょっと落ち着かないなあと思うようなときに「ちょっとこっち見て。いま先生大事なことを言うからね。」と、目と目を見て心を伝えようと話してみる。ちゃんと目を見ないで顔をよけるんです。目と目を見つめることを避けるんです。そういう子どもの場合には心の中に深い大きなずれがあって、心の触れ合いが十分にできません。こういう子どもに大事なことを話すときには、お母さんにもこの子の目を見て話してねと。普段の話はよいのですが、でも大事なことを話すとき、「明日お母さん忙しいの。ちょっと遅くなるけどお留守番していてくれる？」なんてことを話すようなときに、ちゃんと目を見て話してください。ということをお母さんたちにお願ひすることもとても大事なことです。これを繰り返していくと、子どもの行動が落ち着いてくる。肌の触れ合いと心の触れ合い。これが子どもたちの育ちに非常に大事だということ、子どもから出るSOSの意味を読み解きながら見える、それが私の仕事であります。

おそらく皆さんが、こういうことを知ることによって、様々な仕事のアイディア、またはお母さんたちへの少しでも役に立つ助言のアイディアがますます増えていくのではないかとそう思うのです。

さて、行動に表れるシグナルをお話ししましたが、それと並んで大事な身体に表れるシグナルです。身体に表れるシグナルの中で、私がここでどうしても皆さんにお話したいのは、今、福島の子どもたちがどうなっているのかということですね。

本当に残念な事故でございますが、その中で新聞が報じているんですけど、福島の幼児、扁平足が2.5倍。他の地域の子どもに比べて、2.5倍福島の子どもたちは運動不足によって足のくぼみができない扁平足になる。これは体が示している大変なシグナルです。もう既に新聞でも、厚生労働省のほうからも、子どもの肥満が増えているというニュースは前にも流れています。それと合わせて、子どもたちの体が、子どもが必要とする運動の量を欠いていると子どもたちにこのような変化が表れるということを示しています。こんな記事です。

東京電力福島第一原発事故後に土踏まずにくぼみが無い扁平足の子どもが事故前の2.5倍に増えたことが福島市の保育園の園児調査でわかった。園長は原発事故による放射線の影響で屋外での遊びが制限されたのが関係していると思う、と述べた。

この園長の考え方をサポートするかのよう、弘前大学大学院の尾田先生——教育生理学の先生ですけれども——がこう述べています。扁平足と肥満傾向はまさに運動不足が原因と考えます。扁平足の場合朝礼で立ち続けるのが難しかったり、授業に集中する力が落ちる可能性がある、ということを述べています。こうやって、子どもたちの体が、まさに運動不足を私たちに教えてくれる。その子どもたちが友だちと一緒に遊ぼうと思っても、遊ぶ体力、遊ぶ力が身体に備わっていない、そして、集中力が無い。そういうことが子どもたちの中から得られますので、これも子どもたちの大事なシグナル、まさに育ちのもつれとして私たちが捉えていく必要があると思います。

どうですか？ 皆さんが出会っている子どもたちの、足型取るのは難しいでしょうかね。保育園だったらね、入園した時の足型と、卒園する時の足型をとって、こんなに大きくなりましたよって子ども達の成長を示す。身長を測る場合もありますよね。足が大きくなったというのを卒園のお祝いとして子どもたちに渡す園もあります。いま、子どもたちの体の変化を丁寧に見ていく上でのこういう心遣いで、親たちが具体的なスタンプを見て、うちの子どもの足のくぼみが無い、やっぱり運動不足なんだなあというのがわかるわけです。

今、福島の子どもたちの話をしたので、皆さんの思いは福島に飛んでいるかもしれませんが、私は神戸で生活をしていて、いつもJRや阪急や阪神に乗りながら、これは福島だけの問題ではないとつくづく思うのです。

最近はいびき車に子どもさんを乗せて、電車の中に乗ってくる。今朝は新幹線の中をいびき車に乗せて入ってきたお母さんがいました。私は静かによけて通っていただけなんですが（会場笑）、あれは便利なものですよ。スーパーに買い物に行ったりするとき。ただ私はね、充分もう歩けそうな歳周りの子がいびき車に乗って、いや、縛り付けられて、勝手に動かないようにして、多くの荷物を引っ掛けるフックもいっぱいついていて、この便利さがまさに危険なものでもあるなあ、正直思います。そして、もう充分に成長し、靴を履いていびき車に縛り付けられて電車のなかに乗って来るお子さんを見るとね、ちょっと世話好きの広木君は一言言いたくなりますね（会場笑）。「もう歩けるんじゃないですか？」「降ろしたほうがよいんじゃないですか？」と言いたくなる私がいるわけです。だけど、もうひとりの広木君が言うわけです。「まあまあ、まあ、まあ、しかしこの子は何か事情があるのかもしれない。ひょっとして今からの調子が悪くて歩けないから乗っているのかもしれないのに、余計なことを言うのは大変なことになる。だから言うのはやめておけ。」という僕がいるわけです。この葛藤でございます。

いつも電車に乗りながら、あの便利なもの——それでスーパーに行けば、子どもがお菓子売り場に行ったりおもちゃ売り場に行ったり、ちょこまか行って大変な買い物、そして子どもとのバトル、それを経験しなくてすむ——という安易さが、ある意味いびき

カーを重宝がらせているのだと、そう思います。もちろん文明の利器、使い方が大事なのですけれどね。でも、あれに依存してしまうと、扁平足の子どもが、肥満の子どもが、そういう子どもたちが、どうでしょう、皆さんの地域に増えていないでしょうか。その子どもたちが友だちとの遊びのなかで、様々なトラブルの原因になることはないでしょうか？

子どもたちの体がSOSを出して私達に教えてくれる子育てのアイディア。こんなこともひとつのアイディアにしながらね、ベビーカーの上手な使い方というようなこともまた、子育て支援の中では大事なテーマになりつつあるのではないかと、正直そのように思います。本当はここから子どもの体力、その体力は子どもたちが学習していく上でものすごく大事なことで、賢い体を育てなければ賢い頭が育たないという、この賢い体を育てるということに話が発展して行くわけですけど、今日はちょっとそこまではいかず、一応、体が出しているシグナルにこんなことがあるということを知っていただきたいと思います。

3つ目のシグナルは、子どもたちの症状、「鬱」ですね。症状ですがその一番大きいものは鬱です。

今日ちょっとここで皆さんにご紹介したいのはね、私この3月に短大の学長を任期で辞職いたしまして自由の身になったのです（会場笑）。自由の身になりますと、この3月からなんと毎朝「あまちゃん」が見られるんです。あまちゃんが見られるだけではなく「あさいち」まで見られるわけですね。そのまま続けて見られるわけです。面白いとき、面白くないときもありますが、今年の5月29日、何をしたかという「子どもの鬱」というのであります。「あさいち」が子どもの鬱をするということは、これは相当広がっていることを表しているなと思いました。テーマは「子どもの鬱が増えている」。そして、この子どもの鬱の中で、川崎医科大学の青木省三先生、子どもの心の問題の本場の専門家ですが、この方が「子どもの鬱、それは子どもの自殺につながりかねない症状なので、大変我々は重視しています」と仰いました。どのくらい鬱の子どもがいるかご存知ですか。今、中学校1年生で大体23%が抑鬱症状です。抑鬱症状、それは大変孤独で寂しくて、友達と関わることに大変なためらいを感じたりします。そういう抑鬱症状の子どもが23%。これは北海道大学の先生——大変有名な先生です——がアンケート調査で出された数字です。そして、これを見た文部科学省も大変驚きますよね、丁寧な実態調査をしようということで、北大の精神科の先生たちが札幌の小中学生の千人近い子どもたちを、直接面接して診断しました。その結果、中学校1年生で鬱病を発症している子どもが10%。大体10人に1人が鬱病になっているという結果が出ました。子どもたちがなぜこれほど心を病んでいるのか、なぜこんな症状を提示しているのか。鬱病ではない抑鬱症状が約4分の1弱。そして、病気、鬱ないしは躁鬱病を発症している子どもが10%という、こういうデータがある。これを「あさいち」は子どもの鬱が増えている、ということで取り上げたわけです。大切なのは青木先生がそのなかで、子

どもの鬱には背景がありまして、その2つの背景ということで整理して述べてくださっていました。これがポイントです。

その一つは人間関係の挫折体験です。特に小さな子どもたちのお受験、受験というストレスは、もし受験で合格できればまだいいかもしれませんが、合格できない6歳の子どもって想像することすら難しいです。私が子どもの頃、お受験なかったものですから、6歳の子どもにとってどんなに大変なのか、想像を超えるほどのストレスだろうと思います。こういう人間関係の挫折体験から、「自信の喪失」が生まれて、それが抑鬱症状、孤独感、孤立感になっていくのではないかというのが、一つの背景だそうです。

もう一つの背景は「家庭の不和」。家庭の不和、両親の不和によって子どもが鬱を発症する。特に両親の仲が悪く、お父さんが帰ってきてお酒が入るともう家の中は大変厳しい状況になってしまう。青木先生は仰います。「でも子どもは親が嫌いになれない。親から離されたら生きていけない存在であることを子どもは誰よりもよく知っている。だから親を嫌いになれない、そして、家族がだめになったらどうしようという不安が、子どもの心の中に非常に大きく、そして誰にも相談できない。こうして子どもたちの心の中に、やがて、孤独な、寂しい、そういう思いが生まれてくるのではないかと考えています。

こうして、子どもたちの鬱に代表される子どもたちの症状、やはりこういうことも、いま子どもたちの育ちのもつれを考えた時に欠かせない問題であります。だって、これだけの不況と就職難、そのなかで思うような人生を歩めない、その苛立ちを抱えている父親が、家でそれこそ夫婦の喧嘩を子どもの前で日々演じてしまう、そういうようなときに子どもをどう守ったらよいのか、本当に切ない問題です。そういう時に私たちは昔の共同体とはまた違う、その子どもを守るシェルターをどう地域に作ったらよいのか、などという大変大きな問題と我々は直面するわけです。現代の大きな問題ではありますが、こうして子どもたちの育ちのもつれを示す、子どもたちのSOS。そのSOSをしっかり受け止めていくと、この、行動に表れるSOS、体に表れるSOS、症状に表れるSOSが意外にも身近に、私たちの傍の子どもたちに表れていることがわかります。子育て支援が、今まさにこんなに必要とされている時代はない、そして、親達をサポートしていくことがこんなに大切な日はないということを、皆さんに改めてお話しをしておきたいと思います。

私の話は多分45分までで、よろしいですね。もうそろそろ、45分？（「4時5分まで」との声あり。）まだまだ充分ある？ だめですねえ。さっきちゃんと予習したんですけど。予習したのに。4時5分までいいの？（会場笑）

さて、こういう問題を、我々がどんなように考えていったらよいか——気持ちが大分落ち着いたので（会場笑）、このことを考える上で、皆さんには子育て支援の専門家、この中からはたくさんのコーディネーターが育っていくと思いますが、とても大切なことは、いま子育て支援のことを考える基本的な教養として、子どもを育てる母親に着目した場合、母性や子育て育児というものは、決して本能ではない、ということです。これははっきり学説としてわかっているわけですが、この「本能ではない」、それはあくまでも文化として学んで身に着けていくことであって、学んで身に着けるプロセスがないから、今多くの母親たちは子どもを授かってからどうしたらよいのか分からないという不安の中で子育てをスタートせざるを得ない。このより深い根本問題を私たちはまず学んでおく必要があるだろう、そう思います。

ここで、奈良女子大学の浜田寿美男先生が書かれた「子ども学序説」という専門書があります。この中で、浜田先生はこう書かれています。

かつて子育ては共同体の中で担われ、赤ちゃんが新たに共同体の中で生み出されたとき、誰もがこの赤ちゃん（という自然）と出会い、つきあう。そして育児の文化が、どの世代にも共有されていた。ついこのあいだまで赤ちゃんとして子育ての対象でしかなかった子どもも、数年たてば自分より後に生まれてきた新たな赤ちゃんとの出会い、その（自然との）つきあいをおとなたちの所作から、見よう見まねで身につける。そして自分で自分の身の回りのことができるようになれば、小さな赤ちゃんを背負い、あやし、その身の回りの世話をするようになる。子どもたちは大きくはおとなたちによって守られながら、一方で自分より小さな子どもを守ってもいる。そうした、＜守られながら守る＞過程を重ねて、その子どもが成長しておとなになり、自分が次の世代の子どもを産む世代になったときには、子育ての文化をしっかりと身に浸み込ませている。そうした育児文化が共同体の中で引き継がれ共有されてきたのである。

（編註：同書9頁）

この母性と考えられていたもの、そして、育児と考えられていたものは、実はこれは本能ではなくて、文化として前の世代から次の世代へと共同体の中で伝承されていった、受け継がれていったというこのことは、子育てのこと、教育のことを考えるときに基本的な知識として我々は共有する必要がある、そう思います。

問題は、それが難しくなった、ここ何年かで。その中で若い親たちが子どもを授かりながらどうしたらよいか分からないという、その苦しみに直面しているというより深い問題を我々は知っておく必要があります。浜田先生はこう書いておられます。

近代になって核家族化が進行することで、世代構成のかたちが大きく変化した。その結果、かつて育児の文化をごく普通に身にしみ込ませていた育児の共同体が、私たちの周囲から徐々に失われてきた。現に、いまでは、結婚して自分の子どもが生まれるまで、赤ちゃんの世話をしたことがないという女性が少なくない。いや、生まれてはじめて抱いた赤ちゃんが自分の赤ちゃんだったという女性もいる。この女性たちは、赤ちゃんという自然とのつきあい方を知らないまま成人して、自らが赤ちゃんを産んだとき、不安のなかで育児を始めざるをえない。(中略) 子どもの虐待なども、大きく見れば、その結果の一つかもしれない。

(編註：同書9頁)

と、浜田先生はこの中で書かれています。これは大変重たい問題ですけれども、私達の身の周りにこういうことは少なからず起きている。

私は長崎のある病院の産婦人科の看護師の皆さんの研修会に呼んでいただいて、そして小さな子どもの心理についてお話をさせていただいたんです。そのときに、看護師の部長さんが来られてご挨拶をしてくれました。最近は本当に難しいことがいっぱいあるのですが、とってこんなお話をしてくれました。初めて男の子を授かったお母さんが、男の子を産み落として疲れた体を休めて、ご自分のベッドに横になっていた。生まれた赤ちゃんを、産湯を使わせて綺麗にして真っ白なタオルに赤ちゃんをしっかりとくるんで、お母さんにこれがあなたの赤ちゃんですよって、看護師さんが手にもたせて。お母さんは受け取ってから手が震えて、そして赤ちゃんをベッドの上に投げ出してしまった。こうしたお母さんの例は、多くはないけれど、今は時々見られるんです。そう話してくださいました。こういう、母性や育児が決して本能なのではなくて、それはまさに文化を受け継ぐようにして多くの人が学んで、そして我が子と出会う。その予習をするチャンスを持てなかった今の多くの親たちが、我が子と出会った時に、この三千何グラムの子どもの——命の重さですから——限りない重さとして感じられて、どうしたらよいのか分からない。パニックになって我が子をベッドの上にぼんと放り出すような、そんなことさえいま起きている。でも、その親たちはそのことを誰にも言えない。その不安や辛さは、まるで、言えば自分が女性として母として失格とでも、それを自ら告白しているかのようなことになりますから、そんなことをなかなか言えない。

そういう親たちにより浴いながら、でもね、今からちゃんと勉強していけば大丈夫ですよ、ということその親たちとともに考え、その機会を提供していくことが非常に大事だと思っています。

そうして、育ちの予習ができなかった、そういう親たちが自分の子どもたちを育てていくときに、唯一自分の経験は、自分が教えられた学校での経験です。そうするとどう

しても子どもを育てるときに、子どもの育ちを待つことが難しくなる。子どもはゆっくり、ゆっくりと、遊びながら、遊びながら、大きくなっていく。その子どもたちの育ちを待てずに、子どもをなんとか教えて、教えることで子育ての変わりにしようとする。こういう現象が生まれてくるわけですね。こうして今、母性やその育児という文化をしっかりと学ぶチャンスがないなかで、親と子どもの間に大きなミスマッチがあるわけです。

皆さんはご存知ですが、小さな子どもをよく観察していると、周りがほとんど干渉しなければ、子どもは好奇心の塊ですから、いろんな物に好奇心を示しては、これはなんだろうと手に取っては口に咥えたり、とにかく好奇心の塊ですよ。その、子どもたちの好奇心は、探究、探索の行動として色々な物に触れ、舐め、そうして学習していくわけです。でもその一つひとつが親たちから見ると、まどろっしくて、しかも汚らしくてどうも見ておれない。こうして親は子どもたちに、物に触れたり舐めたりすることを、一つひとつ駄目ですよ、駄目ですよといいながら育てている。駄目出しの子育て。この駄目出しの子育てで育てられた子どもたちは、本当に常に親の視線を気にする。親から指示される、指示がなければ動けないような、そんな子どもたちにもなっている。

子どもたちは正に好奇心の塊であるだけではなくて、子どもたちは観察のプロですね。よく観察をして、その観察したものを懸命に模倣しようとする。これが子どもたちの育ちにとって、異年齢のお兄ちゃんやお姉ちゃんの存在がどれほど大事であるかということを示す、保育園でお仕事をされている皆さんならとてもよく分かると思います。年長さんのようになりたい、お兄ちゃん、お姉ちゃんのようにになりたい、そうやってそれぞれ年長さんの文化、年長さんのお仕事をしっかりと子どもたちのなかで位置付けている保育園では、その歳の下の子ども達は、いつもお兄ちゃんたちお姉ちゃんたちの姿に憧れながら、背伸びをしながら育とうとします。これが、子どもは観察のプロ、そして子どもは模倣をしながら、背伸びをしながら子供たちは大きくなるということが分かっています。

そしてもうひとつは、子どもたちは社会的本能の持ち主だということです。いや、我々人間はみんな、社会的本能の持ち主です。この社会的本能は子どもたちに人の役に立てる自分でありたいということを、とても強く持つわけです。こうして子どもたちはすぐにお手伝いをしたがるのです。先程の浜田寿美男先生の本にはこう書かれています。人間というのは奇妙な生き物である。自分の力を使って自分の利益になることを行い、それが上手くいけば嬉しいというのは、個体が生き残っていくために当然のことだが、自分の力を使って何かをやって、他の人、とりわけ身近な他者が喜んでくれると、それがまた嬉しい。そういう生き物なのだ。これもまた人間の自然であって、他の生き物にはあまり例がない。そう書いています。

だから小さな子どもたちは、家の中での姿でいえば、お食事を作っていらっしゃる、または片付けていらっしゃるお母さんの真似をしたくて仕様がな。2歳くらいになる

と一生懸命お片付けをしようとする。でも皿が割れるといけないから、もうお母さんがやるからいいわ、といって子どもの社会的本能の芽生えを押さえてしまうケースものすごく多いのですね。お皿が割れるよりも子どもが手伝ってくれるほうがよっぽど嬉しいのに。あなたのおかげでお母さんとっても楽ができたわ、ありがとうと、こんな子どもの社会的本能を育てて行くと、子どもの心の中に人の役に立てる自分になりたいという、強い動機が芽生えてこれが成長していきます。これが将来、いろんな人困った人を助ける看護師さんになりたい、お医者さんになりたい、そして困った人を助ける弁護士さんになりたい、そうした様々な強いイメージを子どもたちに引き寄せる大事な力、これを「社会的本能」といいます。いま、この社会的本能、小さな子どもからみんな持っているこの本能が打ち消されている。「そんなことする暇があったらお利口さんにしなさい」「そんなことする暇があったら勉強しなさい」と言って育てられてきた子どもたちは、社会的本能がどんどん薄れてきて、いつの間にか自己中心の消費者的本能が育ってしまいます。

消費者的本能が育っている家庭で、どうですか、皆さんの家庭で食事をするときにお母さんに「おかわり」なんて平気でお母さんに求めるような小中学生はいませんか。お母さんは子どもたちの召使ではない。ご飯は一生懸命みんなのために作るけど、ご飯をよそうことは自分でできるでしょ。そして、食べたものを下げること、それはお母さんの仕事を少しでも楽にして、そして、一生懸命家のために頑張ってください、そのお母さんのことを大切に、その心の表れですからね。こうして育つはずの社会的本能がいつの間にか消費者的本能、何々してもらって当たり前、買ってもらう当たり前、やってもらって当たり前という、その消費者的本能がものすごく育ちやすくなっている。こうして、子どもたちの中の育つ芽である好奇心、観察の力、更に社会的本能、これらが旺盛に働いている子どもたちの姿は本当に見る者に、子どものかわいらしさ、子どもの輝き、そういうものを我々に教えてくれますが、こういう力が子どもたちから磨耗をさせられて、その力が表に出てこないケースが大変最近は増えています。こうして、子どもたちの、いわば育児文化の継承が非常に難しくなっている中で、子育て支援の仕事の、ここに大きな課題があるわけですね。

その意味で、子育てのプロ、たとえば保育士の経験者や子育ての上手なおばさんたちなど、地域にいらっしゃるそういう人材を大事にしながら、子どもを授かった親たちに、子どもを慈しむ、子どもを育む、まさに育児と母性というものはどういうものなのかを、口で話してもなかなか伝わらないけれども、一緒に子どもを育てながら、こうすれば子どもは喜ぶ、こうすれば子どもは楽しさを感じる、ということ、ベテランの保育士や、または子育て上手の、地域の子どもの育て上げた人の力を組織しながらお母さんたちに伝える。育児の文化は学んで身に付けていいんだよと。それをまるで本能のように誤解していると。子どもと上手くいかないのは自分に力がないからと自分を責める、でもそれは誰にも相談できない、そういう想いに、自ら虜になってしまうのですね。ですから、

子育て、育児、まさに母性は、学んで身に付けていくものなのだからね、安心してここに来て、子育てのプロたちに分からないことは聞いて、そして学んでください。そうした場面をつくるということが、おそらくこれからものすごく大事になってきます。かつて共同体が担ってきたこの育児の文化の継承という非常に大事な仕事を、これからはこの子育て支援のこの仕事が担っていく、そういう意味でとても私は注目しなければいけない、そういう問題だという風に思っています。「育児の予習」、そのことの大切さをまず皆さんに是非知っていただきたいとそう思います。

それから、今日ここには男性の方も大分見えていますので、私大変心強いのですが、実は皆さんもご存知のように、国連の子どもの権利委員会が日本の子育ての大変さについて、いくつかの提言を行ってくれています。その子どもたちの育ちを支える、国連の専門家が見た子育ての問題の大切さについてですね、ここでもうひとつ。母親の母性や育児、これが文化として学んで身に付けていく大切なものだということを親たちにどう伝えていくか、ここが非常に大事な課題になっていることと並んで、もうひとつ大事なのは、国連が我々に出してくれている勧告、助言なんです。

このように書いてあります。本委員会（国連の子どもの権利委員会）は、日本社会において家族的価値の重要性が揺るぎないものであることを認識しながらも、親子関係の荒廃が子どもの情緒的及び心理的幸福度に否定的な影響を与えていることを懸念する、というものなのです。すなわち日本人は、家族の大切さということについて、世界のどの国の人たちよりもよく知っている。日本人ほど家族を大事にする人はいないといってもいいくらい。あえて言えばですよ。こうして、日本社会において家族的価値の重要性が揺るぎないものであるということは分かっているが、しかし、親子関係は荒廃して、子どもの情緒的及び心理的幸福度が下がっている。このところに着目しているということを行っているわけです。そして何を提言しているか、その提言しているものをちょっとご紹介しましょう。

例えばこう書いてあります。当委員会は、子ども及びその家庭の生活に民間企業が巨大なインパクトを与えていることに留意し、子どもの幸福及び発達に関する企業セクターの社会的及び環境的責任に対する政府による規制が欠如していることに遺憾の念を表明する。

なかなか難しい表現ですけども、私はこのことをごく掻い摘まんで、簡潔に表現するところになります。今、この中で家族の団欒、夕ご飯をお父さんとお母さんと子どもたちと一緒に囲んでいる家庭はどのくらいあるかということ、いつの頃からそれができなくなったのか。これが、まさにここ二、三十年、もうちょっとあるかもしれないけれど、この間、グローバル化の進展の中で今、家庭の団欒の機会を持つことが非常に難しくなっている。このことがもうひとつ、父親が父親として育つ機会を父親から奪っているという、そうした大きな問題になっていることも子育て支援で是非考えておいてほしいのです。

というのは、子育て支援というと、今までお話ししてきたように母親の母性や育児ということにどうしても焦点が当たりがちです。これがどうしても中心になることは避けがたいのですが、実はその母親たちが子どもを育てるのに、大事なエネルギーを発揮するために、父親の存在がどれほど大事かということなんですよね。この父親の問題を、子育て支援の中でどう扱っていくか、どうこれを語っていくのか。やはりこの視点を持たなければ、何かあると母親だけが問われて、もう本当に母親をやってられないというくらいに、その重圧を私は感じるのではないかと思います。そこでね、私は全国でこのことを紹介しながら、家族の団欒ということの大切さを訴えています。

私の家は大変貧しかったけれど、でも、私が小学生の頃を思い起こせば、夕方6時から6時半になれば、夕ご飯の前に父は帰ってきました。お勤めから。そして、父は帰ってきて、それから家族と一緒に食事をして、これは日々、日常だったのです。今この家族の団欒を、ありふれた日常を持っている家庭は本当に少ないです。お父さんの帰りは10時、11時、12時、もう子どもはほとんど寝ているか、それくらいにならないと帰って来ない。お母さんも大変です。こういう状態の中で子育てをするということがいかに大変なのかということです。

私は、その意味でね、今日ここにも男性の大変強い味方がいらっしゃるの——男性こそこの問題を社会にアピールする大事な存在だと思うのですが——、私は父親たちにこう講演会で話すことにしています。できたら週1回、今日は家族で大事なことがあるから、残業は、悪いけどちょっと失敬させてくれと言える職場環境をどうしたらつくれるか。勇気を出してそう言って、1週間に1度は家で家族と、家族みんながそろって夕ご飯。わざとらしくしないでいいですよ。お母さんが食事を作る。お父さんはビールを飲みながらテレビを見ている。もちろんお母さんは、お父ちゃんも手伝ってよと、ぶつくさ言っている。そのようなありふれた日常が大事なわけですよ。子どもはそういうのを見ながら、色々なものを実は感じている。そして、家にいてちょっと落ち着いているそのお父さんに纏わり付きながら、お父さんに「プロレスごっこしよ！」と言ってそんなふうじゃあう。これをじゃああ遊びといいますけど、そのじゃああを通してお父さんも子どものことを知り、子どももお父さんの力強さを感じる。そういうことが実は家族の団欒を通して、かつては可能でありました。いま、これのできる家庭が非常に少ない。1週間に1回はどうですか？とお話すると、1週間に1回は難しいです、そう言われる方が少なくないです。では、せめて2週間に1回、子どもとともにありふれた日常、団欒ということを実現するという、それを努力目標にできませんか、と。

法令などでそれぞれの企業が家族の団欒を保障するということになればよいのだけれども、こういうことはもっともっと時間がかかりますよね、社会の変化ですから。だから、それぞれの父親の努力、又はそれぞれの企業の中の努力が、私は非常に大事なのではないかと考えています。

と申しますのはね、昨日、神戸大時代のゼミの学生たちが、先生久しぶりに飲もうと電話が来て大阪で飲んだのですけどね、その中の誰かが結婚するとみんな寄ってきて披露宴とかで楽しくワイワイやるわけです。ある卒業生の結婚式の時に戻ってきた学生達と、2次会に行って3次会、ほとんど広木ゼミだけが残りました。そのゼミの学生達にね、いや実は、国連からこんな勧告が来ているんだよ。みんなどう思う？って話をしたら、この結婚式に出るためにドイツから戻ってきた元学生がね、実は戻ってきて日本には夜がない、そう思いました。ドイツではほとんどの街で夜大体6時7時くらいになると街に灯がともって、家の中に外から帰ってきたお父さんお母さんがいて、コンビニも閉まり、何も閉まり、自動販売機もないからもう街灯だけ。要するに8時間は社会のため、自らの権利義務として労働するわけですが、後の8時間は家族のために、そしてあとの8時間は自らの心身の回復のために休む、そういうことをそれなりに守ろうとしている国でね、家族の団欒ということはとっても大事にされている。しかも、日曜日には家族揃って教会に行くということもあるし、家族という単位を守るためのいろんな工夫がされている。今の日本ではそれができていない、それがなかなかできない。

今朝、NHKを見ていたら、伊藤忠商事という大きな企業がありますが、みんながずうっと残業していたけれども、これをできるだけなくそう、一番長くても7時になったらやめろという社長命令で、早く帰って家族と一緒に過ごすということをこれから始めると言っていました。今私がお話ししているようなことをいち早く掴むのが、経営者のなかにもね、そうすることが実は社員の気力が豊かになって、それが企業経営にも大きな影響を及ぼすと考え始めているところが出ています。そうしてね、父親たちが子どもと一緒に過ごすチャンスを持ってないでいると、本当にたまに家にいると大体お父さんがやるのは、子どもを車に乗せて遠くに行って、これで父親の役割を果たしたとかね。または、ファミリーレストランに連れて行って、そこで一緒に食べて終わりとかね。ありふれた日常ではなくて、非日常を演ずるのが父親の役割になってしまう。そこでは子どもたちの本当の姿、子どもとじゃれあったり、子どもと関わることで子どもの姿を心に刻むという機会が非常に少なくなっている。こういう意味でね、今、ほとんどの母親たちが共同体から子育ての文化を学ぶということが難しくなっているだけでなく、家族そのものが十分に家族として機能するその条件が厳しくなっているために、父親が父親として育つことさえ必ずしも楽ではない。このなかで、母親たちの子育てのストレスは非常に強まっているということ、やはり我々はちゃんと頭の中に入れてね、お父さんたちの勉強会とか、お父さんと一緒に飲みながら、ありふれた日常がとっても大事なんだよということをぜひ伝えたい。そう私は思っています。

さて、家族の団欒という言葉の一つのキーワードにしてお話をしましたが、ここで最後に団欒についてまとめておくと、家族の団欒によって育つものが3つあるんです。

その1つは、親と子の愛着関係です。団欒によって、子どもは親に甘えるということが出来ます。甘えることができないと子どもは心がどんどん落ち着かなくなると、親の

要求することと自分の甘えたいという気持ちと、それがぶつかり合って子どもは大変な欲求不満に陥っていきます。荒れた子どもになっていきます。こうして子どもたちの団欒を通して愛着関係を体験し、愛着の心を形成していくという、それがあれば親は子どもに対してこうなさいということ強く要求したとしても、それが子どもの中の大きな崩れや問題にはならない。その意味で愛着関係を形成するということが、これが子どもたちとの団欒を保障するということの非常に大事な意味なのです。

そして2つめが先ほどお話しした、母親が母親として、父親が父親として育つ。特に父親の育ち。その父親の育ちの機会が奪われてしまっている。たまの休みでも子どもと一緒にいて何をやったらいいのか分からない。借りてきたお人形のようにおとなしいお父さんになってしまう。やはりそういうことでは、子どもがしっかりと育つという条件が出てきません。

最後の3つめは、家族の団欒を持つことによって、夫婦の関係が育ちます。いま、この夫婦の関係が十分に育たずに、意思疎通が上手くいかずに、子育てのことで対立して、家庭がばらばらになってしまう例は決して少なくありません。私の不登校のカウンセリングは、何割かは大体離婚の相談まで発展します。子どもはお前に任せた、という父親がいる。それはないだろう、この核家族の時代に父親の支えなしに子育てなんて、どれほど難しいことか。そのことすら父親は学ぶ機会が持てずに、子育てはお前に任せたのと言われると、一番大変な頼りたい時に見放された母親は本当に苦しみます。そして、私が本当に愛した人はこの人だったのだろうか、という苦しみを背負うんですよ、お母さんたちは。その苦しみの相談を受けるんです。不登校の相談は子どもの心理カウンセラーだけではなくてですね、この、親の、夫婦関係のカウンセリングになることがものすごく多いのです。こうして別居を余儀なくされたり、分れざるを得なくなる、そういうケースにも立ち会いながら、でも子どもの利益を守るうえで何が大切なのか。父親と一緒にカウンセリングに来てくれて会社を休んでくれた、8割解決です。これはもう経験法則です。父親がそれだけ一肌脱いで一緒になって来てくれたとき、そのときが本当に8割解決。それは経験として凄く大事なことなので皆様にお伝えしておきます。

最後にひとつ、今子育て中の親たちに、母子家庭で子育てを頑張っている方たちの問題をしっかりと位置付けていかないと、子育て支援としては成り立ちません。その意味で私は母子家庭の子育ての問題をどう考えるか、それについても一つのヒントを皆さんにお話ししておきたいと思います。

最後なので手短にしますが、北海道で講演会をしたあと、フロアから質問を取ったんです。そうしたら何百人も来ているなかで一人のお母さんがこう質問を始めたんです。30歳、2人の子どもの母親として自分自身のことを相談します。23歳の時、妊娠したので結婚しました。子どもは欲しくなかったけどできてしまったので産みました、とお母さんが話し始めたんです。あまりにも重たい内容を話されるので、これは個別カウンセリングで後でとよっぽど言うべきかなと思ったのですが、お母さんが発言をしていら

っしやる。とにかく聞こうと思って心を改めて聞きました。子どもは欲しくなかったけどできてしまったので産みました。夫婦喧嘩が絶えませんでした。夫はきつい家庭で育った人で純粋な人だったけど、暴力が絶えず、子どもは泣かない子ども、サイレントベビーになりました。その頃、2人目の子どもができたけれど、みんながおかしくなると思い、悩んだあげく離婚しました。その頃は、2人の子どもと一緒に死にたいと思っていました。そして、子供を愛したいけど愛せないという気持ちが消せませんでした。その時、生きるために働かなければならないのでこの保育園に、——保育園が呼んでくれたんですけどね、この保育園に子どもを預けることにしました。園長は私の話を何回も、何回も聞いてくれました。そのおかげで今は子どもと少し前向きに関われるかなという気持ちになっています。最近子どもが可愛いと感じられるようになりました。これから母子家庭で2人の子どもを育てていきますが、子どもはちゃんと育つでしょうか、教えてください、とそのお母さんはおっしゃったんです。

ものすごく勇気ある発言です。僕はもうドキドキしながらそのお母さんの発言を聞きました。そして、このたくさんの人の中で手を上げて、この重たい発言をする勇気はどこから湧いてくるのだろう、まずそのことをドキドキしながら感じました。その勇気はこの2人の子どもにしっかりと育て欲しい、それを育てられる自分でありたいと、子どもに対するものすごく深い愛がね、私はその勇気なのではないかと、本当にそう思いました。

だからまずお母さんに、いま、あなたが手を上げた勇気、子どもを思う心、それが何よりも尊いと思う。あれこれの小さな方法よりも、まずその心を忘れずに大切にしたいと思いましたが、ということをお伝えしました。その上で、母子家庭の子育てで大事なことは3つ、この3つをしっかりと守ることをこれからやっていってください。

その1つは、母子家庭で子育てをする時、お母さんはどこまでもお母さんのまんまでいてください。二親分をやろうと思って肩に力が入って、お父さんがいたらこうするだろうと思って、一人で二親役をしようとする、実は子どもから見るととても窮屈な、そういう親子関係になってしまう。お母さんのまんまで、温かく、細やかに、時には口うるさく、そういうお母さんのまんまでいてください。あなたのまんまでいることが子どもにとって大事なことです。私はこれは、いろんな子どものカウンセリングから学びました。お母さんが自分のまんまでいるときに一番気持ちが楽、子どもがそう教えてくれたんです。

そして2番目に大切なことは、それは、保育園で出会った友だちのなかで自分の心を正直に話せる、一番大事な友だちを見つけること。その友だちと家族ぐるみの付き合いを是非してください。これからだったら、冬だったら鍋を囲んで、ひと月に1度ぐらい、ふた月に1度だつていい、一緒に鍋を囲んでそこのうちの子どもと、そこのうちのおじちゃんと、一緒にお父さんとの付き合い方、そんなものをそのおじちゃんと一緒にやらせてもらってください。肩車してもらってもいい。腕相撲するのもいい。じゃれてプロ

レスごっこするんだ、そういう経験をぜひ、心を許せる仲間との家族ぐるみの付き合いを是非やってみてください。これが2つめです。

そして3つめに大事なのは、それでもなお解決しがたい難しい悩み、不安、そういうものが心に起こることはあるでしょう。そんなときは子育てのプロにしっかりと相談してください。もし、どうしても心理カウンセリングが必要であれば、私の知っている方を紹介しましょうと、そんなこともお話ししながら、お母さんは自分のままでいい。そして心許せる友だちと家族ぐるみの付き合いをしながらお互いに子どもを育てあう。そして、最後は勇気を出して、本当に困ったときは相談する。今日のような勇気を出して相談する。これを自分自身の3つの心得として子育てをしていれば、子どもたちはちゃんと育ちますよ。そうお話をいたしました。

実際に多くの少年事件を調べていくと、深刻な事件——秋葉原事件もそうです。酒鬼薔薇事件もそうです。その他の事件もそうですけど——深刻な少年事件を引き起こした者の多くは両親が揃っている家庭です。むしろ母子家庭で本当に子どものために身を粉にして働いたその子どもたちの話を聞くと、お母さんを早く楽にしてあげたい——社会的本能です。そのために一生懸命勉強して、資格をとって保育士になるんだとかね——そういう頑張っている子どもたちが少なくない。だから、今言った3つのことをしっかりと胸に抱いて、これから子どもを守ってくださいということをお話ししました。

こうして、子育て支援というのは子育て中の親たちに、子ども、子育ての文化をしっかりと受け継いでいけるような仕組みをつくること、そしてその母親を支えながら、家族をつくるその父親を励まし、父親が父親として育てるような何か工夫を考えていく。そして同時に、母子家庭で懸命に子育てしていらっしゃる方も安心して参加して、ちゃんと自分のことも分かってもらえているというその雰囲気を持った子育て支援のセンターが本当に大事なのだと思います。

かつて共同体が担っていた役割を、皆さんは21世紀にその役割をこういう仕組みのなかで果たすしかないし、これがどれだけしっかりと社会的基盤をつくるかによって、まさに21世紀を担う子どもが育つかどうか、それを左右する大変大事な仕事だと思っています。その意味で、今日ここで、つたない話でしたがさせていただいて、子どもたちのSOSも少し皆さんにお話しすることができ、大変ありがたかったと思っています。

最後までご清聴ありがとうございました。